第３章

インクルーシブ教育システムの理解啓発に関する実態調査

Ⅰ．目　的

Ⅱ．方　法

Ⅲ．結果と考察

１．回収状況

２．「学校全体用」の調査結果

３．「学級担任用」の調査結果

４．考察

Ⅰ．目　的

第２章で述べた小・中学校への訪問調査等から、通常の学級の教師の「何気ない」「普段の」授業や取組の中に、児童・生徒に対するインクルーシブ教育システムの理解啓発の要素が含まれていると考えられた。

本調査では、小・中学校が「学校全体」として、また、通常の学級の「学級担任」が、授業や学級経営において行っていることを広く（ありのままに）調査し、小・中学校や通常の学級におけるインクルーシブ教育システムの理解啓発につながる取組の実態を整理、分析することを目的とした。

Ⅱ．方　法

１．対　象

調査対象は、６市の公立小・中学校であった。６市の内訳は令和元年度地域実践研究事業に参加している５市（本研究に参加している４市と他の研究に参加している１市）と地域実践研究には参加していないが、本研究が目指す「理解啓発」に関心を寄せている１市であった。

総数は小学校 125 校、中学校 59 校、合計 184 校で、内訳は表３－１のとおりである。いずれも、各市内の全小・中学校である。

表３－１　調査対象となった小・中学校数

	Ａ市	Ｂ市	Ｃ市	Ｄ市	Ｅ市	Ｆ市	合計
小学校	９	２４	１１	４６	１７	１８	１２５
中学校	５	１０	４	２３	１２	５	５９
合　計	１４	３４	１５	６９	２９	２３	１８４

２．手続き

研究チームから、上記６市教育委員会に対し、調査内容や方法等について説明し、各教育委員会から、各市の校長会において小・中学校長に対して説明をしていただいた。校長会での説明が終了した段階で、研究チームから各学校へ質問紙を直接郵送した。各学校には、「学校全体用」１部と、「学級担任用」を小学校では６部、中学校では３部を発送し、各学年から１名ずつ回答いただくように依頼した。

各学校での回答が終了したら、「学校全体用」と全学年の「学級担任用」を、一括して研究チームへ送付するよう依頼した。

研究チームからの発送は、令和元年９月中旬であり、返送締切の目安を同年 10 月 21 日とした。

３．調査用紙

調査用紙は「学校全体用」と「学級担任用」の２種類であり、「学校全体用」はＡ４用紙２ページで、「学級担任用」はＡ４用紙４ページ分をＡ３用紙に両面印刷したものであった。「学校全体用」については、校内全体を把握している校長、副校長・教頭、教務主任、特別支援教育コーディネーターのいずれかに回答していただくよう依頼した。「学級担任用」は、各学年の通常の学級の担任から１名ずつ回答していただくよう依頼した。本調査の目的は通常の学級の実態把握にあるため、特別支援学級担任や通級指導教室の担当者は調査対象としなかった。

４．倫理的配慮

調査実施にあたり、本研究所の倫理審査を申請し許可を得て実施した。各学校には、回答の途中で継続が難しくなったり、答えたくない質問があったりした場合には、未記入のままの項目があっても差し支えないこと、回答いただいた調査用紙は研究目的にのみ使用すること等を紙面で伝えた。

Ⅲ．結果と考察

１．回収状況

調査用紙を発送した小学校 125 校、中学校 59 校、総数 184 校に対して、小学校 99 校、中学校 50 校、合計 149 校から回答があった。

回収率は、小学校 79.2％、中学校 84.7％、全体で 81.0％であった。

２．「学校全体用」の調査結果

「学校全体用」の調査用紙への回答は、小学校 98 校、中学校 50 校、合計 148 校であった（小学校の回収は 99 校であったが、１校が「学校全体用」について不回答であった）。

（１）「総合的な学習の時間」における障害や障害のある人に関する授業

学校全体あるいは学年全体として取り組む「総合的な学習の時間」において、今年度、障害や障害のある人に関する授業をしたことや授業をする計画の有無や実施学年、題材、授業者、教材等について回答を求めた。

①小学校

授業の実施の有無についての回答結果を図３－１に示した。全体の７割の学校で障害や障害のある人に関する授業が実施されていた。授業の実施学年についての回答結果を、図３－２に示した（複数回答可）。４年生が最も多かった。これは、４年生の国語の教科書に視覚障害や視覚障害のある人への支援を扱った説明文の単元があるためと考えられる。

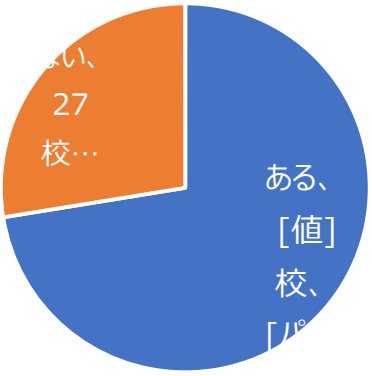


図３－１　授業の実施の有無

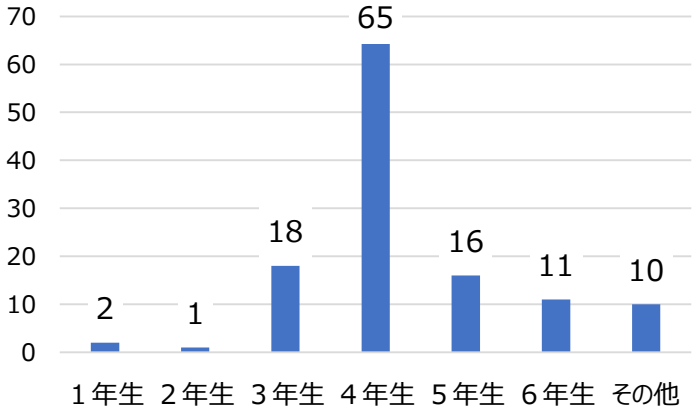
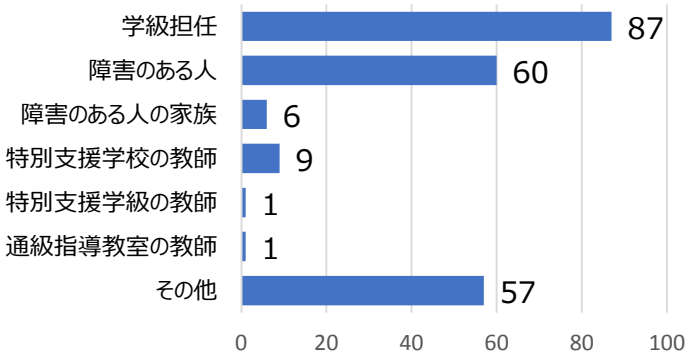


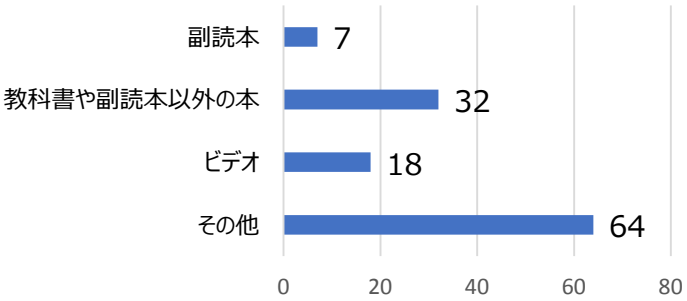
図３－２　授業の実施学年（複数回答）

授業者についての回答結果を図３－３に示した（複数回答可）。学級担任に次いで「障害のある人」が多く、次いで、「その他」の選択肢の順であった。



「その他」の内訳
- 社会福祉協議会職員
- ボランティア
- 点字ボランティア
- 高齢者施設職員
- 専門学校教員
- 障害福祉課職員

図３－３　授業者（複数回答）



「その他」の内訳
- 点字セット、アイマスク、白杖、盲導犬
- 手話の体験
- 車いす、車いすバスケット
- ボッチャ
- インターネット
- パンフレット

図３－４　教材（複数回答）

授業で使用する教材についての回答結果を図３－４に示した（複数回答可）。最も多かったのは「その他」の選択肢であった。

②中学校

授業の実施の有無についての回答結果を図３－５に示した。全体の５割強の学校で障害や障害のある人に関する授業が実施されていた。授業の実施学年についての回答結果を、図３－６に示した（複数回答可）。１年生が最も多く、２年生以降は半減した。

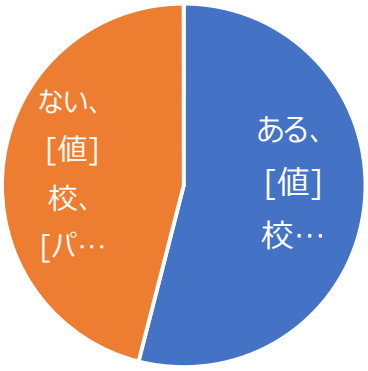


図３－５　授業の実施の有無

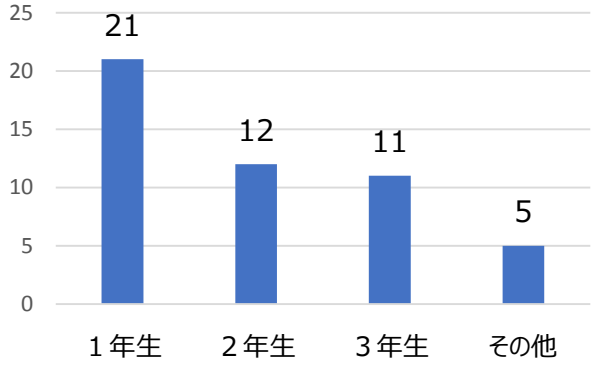


図３－６　授業の実施学年（複数回答）

授業者についての回答結果を図３－７に示した（複数回答可）。最も多かったの「その他」の選択肢であり、次いで、「学級担任」、「障害のある人」の選択肢の順であった。「その他」の記述内容は小学校と同様であった。

教材についての回答結果を図３－８に示した（複数回答可）。最も多かったの「その他」の選択肢であった。「その他」の記述内容は小学校の結果と同様であった。

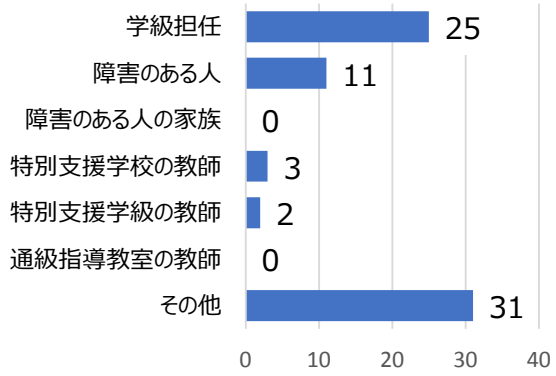


図３－７　授業者（複数回答）

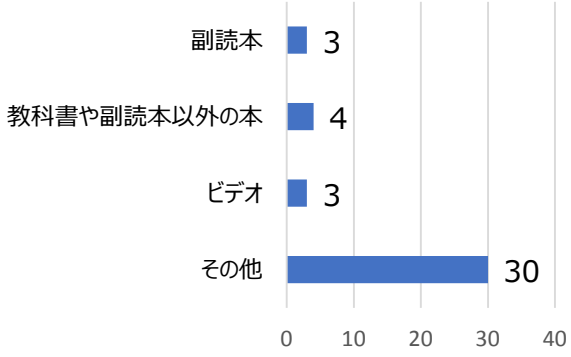


図３－８　教材（複数回答）

（２）保護者に対する特別支援教育やインクルーシブ教育システムの説明

保護者に対して、特別支援教育やインクルーシブ教育システムについて説明をしている場合、どのような機会で実施しているかを選択肢で回答を求めた。小学校、中学校それぞれの回答割合を図３－９にまとめて示した。

最も回答が多かったのは「入学説明会」で、小学校の４分の１、中学校の約半数で実施されていた。続いて、小学校は「その他」、「懇談会」の順であった。「その他」の記述内容としては、「学校だより」「就学時健診」「入学式後の説明」等があった。また、中学校は、「ＰＴＡ総会」「その他」の順であった。「その他」の記述内容としては「学校見学の際」「特別支援学級説明会」等があった。

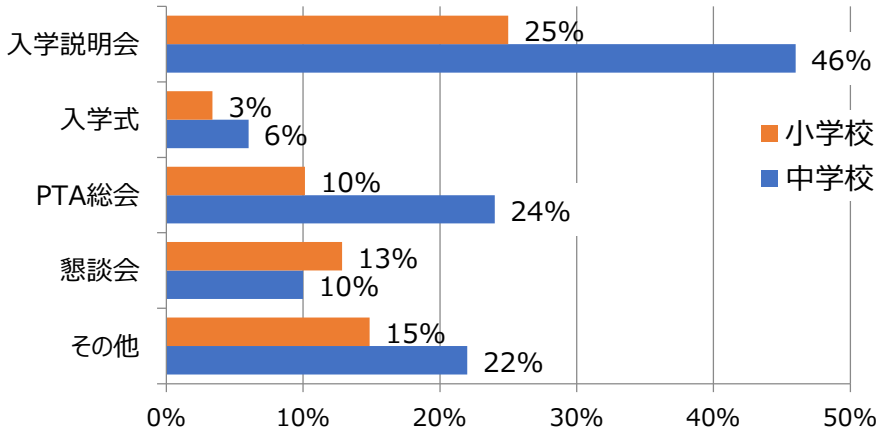


図３－９　保護者への説明の機会（複数回答）

（３）地域の人々に対する特別支援教育やインクルーシブ教育システムの説明

地域の人々に対して、特別支援教育やインクルーシブ教育システムについて説明をしている場合、どのような機会や方法で実施しているかを自由記述で回答を求めた。

小学校では、98 校中 28 校が回答した。内訳は「学校評議員会」等が 21 校、「学校だより」等が３校であった。

中学校では、50 校中 16 校が回答した。内訳は「学校評議員会」等が８校、「地域懇談会」等が４校、「青少年健全育成推進会議」等が３校であった。

３．「学級担任用」の調査結果

（１）気になる子どものまわり子どもへの説明や配慮

学級で「一番気になっている子ども」が、学級内で、うまくいかないことがあったり、不適切な行動をしたりした時、まわりの子どもには、どのように説明したり、配慮をしたりしているかという設問に自由記述で回答を求めた。

この設問には、小学校 493 名、中学校 125 名から回答があり、研究チームの研究員２名で検討した。その結果、表３－２に示した８のカテゴリーに分類した。

表３－２　まわりの子に対する説明・配慮における回答者数と校種ごとの割合

カテゴリー	小学校（493）	中学校（139）
気になる子の具体的な特性の説明・配慮と個々へのかかわり等	345　（70.0%）	76　（54.7%）
一般論で全体に説明	81　（16.4%）	20　（14.4%）
説明・配慮の必要な場面が無い	26　（ 5.3%）	12　（ 8.6%）
まわりの子どもの理解があり、説明・配慮の必要が無い	16　（ 3.2%）	8　（ 5.8%）
説明・配慮はしていない	16　（ 3.2%）	4　（ 2.9%）
本人・保護者の了解を得た上で説明	5　（ 1.0%）	13　（ 9.4%）
本人が居ない場面で説明	4　（ 0.8%）	4　（ 2.9%）
説明・配慮を検討中	0　（ 0.0%）	2　（ 1.4%）

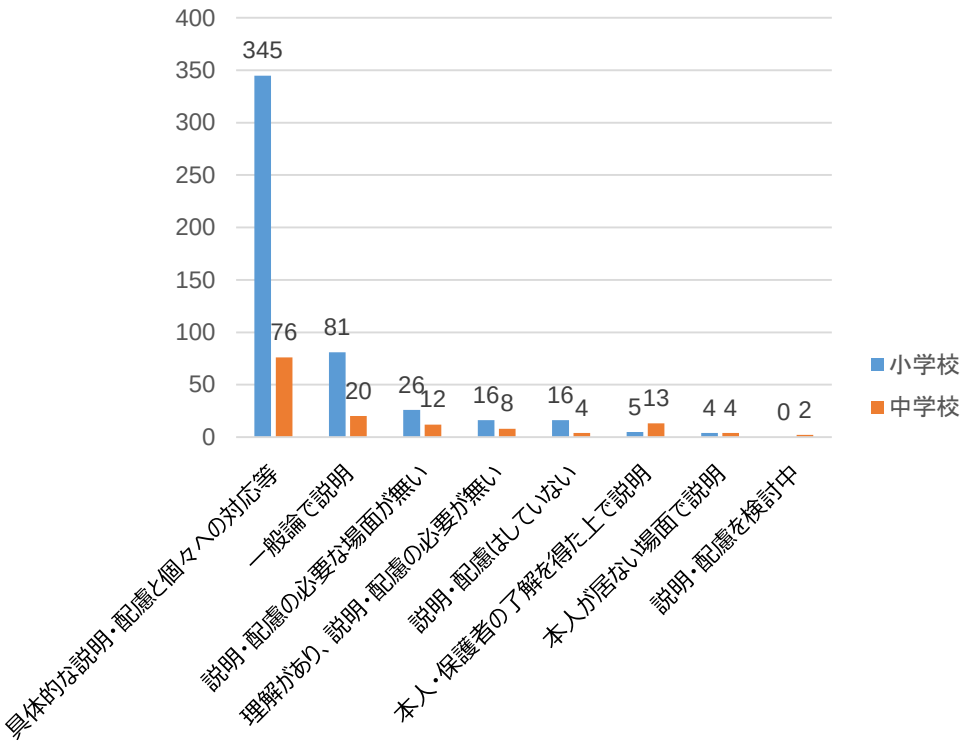


図３－10 まわりの子に対する説明・配慮における回答者数

小学校では、「気になる子の具体的な特性の説明・配慮と個々への関わり等」の回答が最も多く、次いで「一般論で全体に説明」、「説明・配慮の必要な場面が無い」、の回答が続いた。中学校では、「気になる子の具体的な特性の説明・配慮と個々へのかかわり等」の回答が最も多く、次いで「一般論で全体に説明」、「本人・保護者の了解を得た上で説明」の回答が続いた。

以下にカテゴリーごとの回答を抜粋して示す。

●気になる子の具体的な特性の説明・配慮と個々へのかかわり等

小学校：「長い目で見て、接していくこと。その場限りではなく、中学校に行った時や社会に出たとき、その子が困ることにならないようにただ寛容に接するだけでなく、よりよくなるようにみんなで声をかけていこうと話している」「まわりの子どもたちには、本人は一生懸命頑張っていても、それが本人の知的水準であることの理解とともに、他にやさしさ思いやり等、よい点をあげ、友だちと仲よく過ごしていることのすばらしさを話している」「「日本のことを教えてあげよう」と声をかける。外国から来てがんばっていることをまわりの子どもに伝え、理解させる」「トラブルがあった場合、その子も含め、関係する子たち同士で話をする時間を作る。関係した子以外にも話す必要があると感じた場合には、全体に話をするようにしている」

中学校：「どのような言葉かけ（言動）が伝わりやすいかを教える。まわりの子どもの気持ちも代弁し、本人に知識として伝える」「学活や道徳で似たような単元を行って生徒たちに考えさせている。少しでもうまくいったことに対してとにかくほめて、まわりの子どもにも欠点でもなく良い所を発見できるよう声かけをする」「（特別支援学級に在籍している生徒であることは、入学後、間もない段階で学年集会で確認してあるので）その子が学級で生活したいという願いをもっていることや、苦手なことや時間がかかることも少しずつ頑張っていることを教師が伝える」「お互いが納得するまで話を聞いたり、こちらから説明したりして、溝を埋めるようにする」

●一般論で全体に説明

小学校：「学校はまちがえるところだから勉強している・・・のように特に診断がおりているわけではないので障害特性として説明していない。１年生なので、いろいろな子がいても助け合うと指導している」「だれにでも、苦手と得意がある。その苦手が、友だちとの関係であったりする。苦手なことをのりこえるのは、みんなの協力が必要」「クラスの雰囲気づくりについて考えさせ、多様性を受け入れられるような、みんなが居心地の良いクラスを、つくっていこうという話をしています」

中学校：「「できないことがあっても大丈夫だという全体への話。」により、「みんなちがってみんないい」という雰囲気にさせる」「大なり小なり、うまくいかないと感じたり、不適切な行動になってしまいがちな生徒も複数人いるので、全体に向けて説

明する内容を丁寧にしている」「他人を変えるのでは(変わってもらう)なく、自分がどう対応すれば良いか、考えるように話している」

●説明・配慮の必要な場面が無い

小学校:「他にもたくさんいますので特に説明していません。１つの個性」「特にしていません。周りの児童はその児童が特別な配慮を要する児童だとは、まだ理解していないので」

中学校:「現在は、学習の遅れ以外は見られず、友達とコミュニケーションもとれることから、特別な説明等は行っていない」「特に説明をしたりはしていない。(障がいの診断があるわけではない)」

●まわりの子どもの理解があり、説明・配慮の必要が無い

小学校:「小さいころから、固定した人間関係のため、あえて説明したり配慮したりしてはいない。※保育園から一緒」「特に説明はしないが、まわりの子もそのことに対してせめたりせず、励ましたりしている」「説明しなくても彼らなりに感じとって発言・行動している。(周りが受け入れている)」

中学校:「小学校からのかかわりがあるので生徒同士で解決。まわりの子どもに、その生徒に特化して話すことはない」「学級内では、そうした行動は見られない。小学校の時から一緒に過ごしているので、まわりの生徒も気持ちを考え接している」

●説明・配慮はしていない

小学校:「特別、障害のことを明言したり、“○○な性格がある子”など遠回しな言い方をしたりはしていない。(そのような子が複数名在籍している。)」「特別な配慮はしていない。他の子と同じように、事実は事実として伝え、必要に応じてはみんなで考え合う場を設ける。(その子の問題としてでなく、自分の問題、自分だったらという扱い)」

中学校:「特に周りへのフォローはなし」「特には説明をしていません」

●本人・保護者の了解を得た上で説明

小学校:「本児の保護者の承諾をとった上でその子の特性とそれに対するまわりの子たちの対応についてbsをした。また、上手な対応については、ほめてきた」「その子やその子の親に了解をとり、その子の苦手なことという言葉で、不適切な行動についての説明をしている」

中学校:「具体的に苦手なことを伝えてよいか、本人に了解を得て、その上で、協力してくれるように話をしている」「保護者や本人の気持ちを聞き、どのように伝えてほしいか確認しながら伝えている」

●本人が居ない場面で説明

小学校:「その子がいない時に、学級の子どもたちに、○○くんの特性と、こうしたらよい（このように接するとよい）ということを説明し、協力してもらうようにする。上手に対応できたら、個人的に、そっとほめる」「本児がいない時に、本児の苦手

なことを具体的に話して、どのように対応すべきかを一緒に考えている」

中学校：「その生徒が教室に居ない時に、全体的にかかわり方やコミュニケーションのとりかたなどを例を挙げて指導している。(生徒の名前は出さず)」「本人がいないタイミングで何があったのか話しをする。その中で「見守ってやってほしい」とお願いをする」

●説明・配慮を検討中

小学校：回答無し

中学校：「不適切な行動をした時にまわりの子どもも、それを笑ったり、ふざけたりする雰囲気があるので、どう指導するべきか迷っています」「保護者の理解をもらって、周りの子どもへの説明をするべきかどうか、今、そこができていないので、上手く指導できていません」

（２）学級の子どもたちと教師との関係づくり

学級の一人ひとりの子どもと先生との関係づくりにあたって、どのような配慮や工夫をしているかについて、①学級経営において、②授業においての２つに分け、自由記述で回答を求めた。

①学級経営において

学級経営における配慮や工夫について、小学校 548 名、中学校 151 名からの回答を研究員２名で検討した。その結果、表３－３に示した 15 のカテゴリーに分類された。

小学校では「子どもの良さを見つける・認める」の回答が最も多く、次いで「一人一人（全員）とかかわる」、「声をかける・話す」の回答が続いた。学級経営においては、学級の子ども一人一人を大切にし、子どもの良いところを見つけたり、一人一人とかかわり、声をかけたりしている回答が多く挙げられていた。また、「よく観察する」、「よく聞く」のように、子どもの様子を把握したり、子どもの話を聞いたりすることを大切にしている回答も多く見られた。

中学校でも、小学校と同様に、「一人一人（全員）とかかわる」、「声をかける」といった回答が多く認められた。また、中学校においては、「ノート等にコメントを書く」の回答が最も多く、中学校が教科担任制であることから、ノートや日記等を通じて担任は学級の子どもたちと関係づくりを行なっていることが推察される。

以下にカテゴリーごとの回答を抜粋して示す。

●良さを見つける・認める

小学校：「『良いとこみつけ』を毎日し、発表するようにしている」「小さなことでも、良い所、頑張っている所を見付けてほめる」

中学校：「人のために行動をした人の行動を全体でほめる」「学級通信の中で、生徒のいいところを紹介している」

●一人一人（全員）とかかわる

小学校：「毎日必ず全員と話す」「朝、休み時間、給食、帰りの時間を使って、子どもたち一人ひとりと話す時間を作っている」

中学校：「毎日１回は会話をする努力をしている」「全員と会話をして１日を終える」

表３－３　学級経営における配慮と工夫における回答者数と校種ごとの割合

カテゴリー	小学校	中学校
良さを見つける・認める	161　(29.4%)	25　(16.6%)
一人一人（全員）とかかわる	159　(29.0%)	43　(28.5%)
声をかける・話す	149　(27.1%)	46　(30.5%)
よく観察する	73　(13.3%)	23　(15.2%)
よく聞く	70　(12.8%)	16　(10.6%)
一緒に遊ぶ	65　(11.9%)	3　(2.0%)
ノート等にコメントを書く	61　(11.1%)	47　(31.1%)
教師が笑顔（上機嫌）でいる	26　(4.7%)	10　(6.6%)
子どもたちに任せる	19　(3.5%)	6　(4.0%)
できる限り教室に居る	19　(3.5%)	12　(7.9%)
学級目標やルールを大切にする	18　(3.3%)	5　(3.3%)
平等・公平に接する	7　(1.3%)	3　(2.0%)
関係づくり・雰囲気づくり	7　(1.3%)	1　(0.7%)
言葉遣いに気をつける	6　(1.1%)	1　(0.7%)
その他	17　(3.1%)	4　(2.6%)

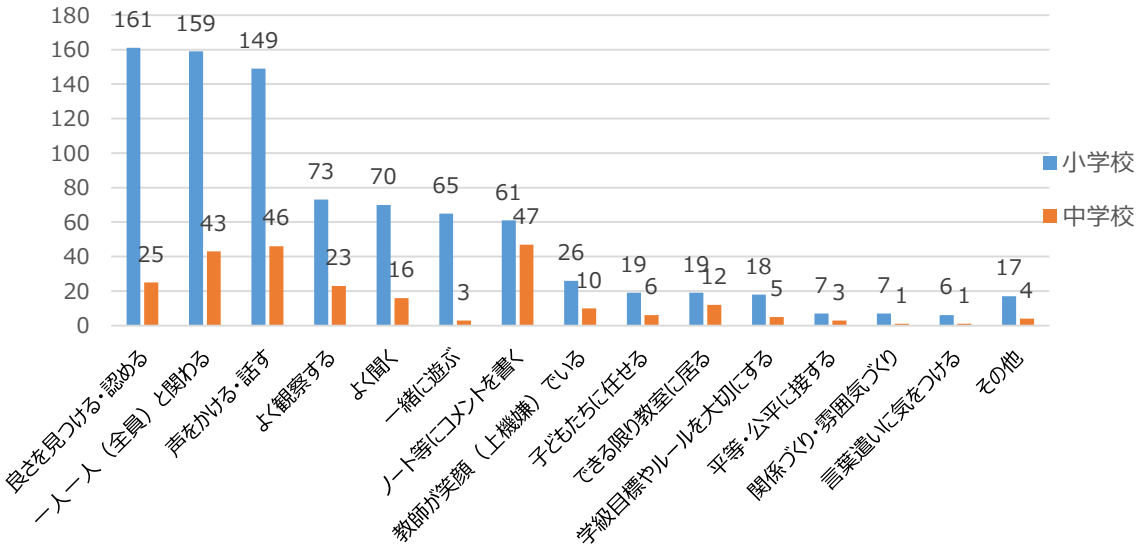


図３－11 学級経営における配慮と工夫における回答者数

●声をかける・話す

小学校：「給食のときに班をまわって声をかけるようにしている」「本人の興味関心の高いことや、休日の過ごし方や家族のことなどを話題にし、コミュニケーションを図る」

中学校：「気になる生徒は特に声をかけるようにしている」「話題を振って子どもと話すようにしている」

●よく観察する

小学校：「1 人 1 人、表情や顔色を見る」「朝、登校時に子ども達を迎え入れた時に、表情や声の調子をよく見て、声をかけるようにしている」

中学校：「朝、一通り全員の顔を見るようにしている」「毎日、１人１人の様子を見て、子どもの変化に気づけるようにしている」

●よく聞く

小学校：「子ども達の思いをできるだけ聞くようにしている」「その子の話を聴く時間を多く持つ」

中学校：「子どものはなしをできるだけいろいろな角度からきくようにしている」「変化に敏感でいられるように、子ども同士の会話にも耳を澄ます」

●一緒に遊ぶ

小学校：「一緒に体を動かしたり、カードゲームに参加したりする」「週 1 回、昼休みに『みんな遊び』を一緒にして、授業中とはちがう一人ひとりの様子をみるようにしているノートは毎回チェックする」

中学校：「昼休みにはたまに生徒と遊ぶようにしている」「昼休みは話しをしたり、いっしょに遊んだりしている」

●ノート等にコメントを書く

小学校：「毎日、交換ノートをして、言葉では表せないことも聞くようにしている」「日記を通して、ささいなことでも相談できるようにしている」

中学校：「日録に毎日コメントを書き、コミュニケーションをとるようにしている」「授業中の一人ひとりの様子を座席表にメモして整理するようにしている」

●教師が笑顔（上機嫌）でいる

小学校:「先生がきげんよく笑顔でいること」「自分がいつもとにかく笑顔で楽しくすごす」

中学校：「常に『上機嫌』を心がける」「いつも笑顔でいる」

●子どもたちに任せる

小学校：「教師がなるべく介入しない」「解決策はできる限り、子ども達で考えさせるようにしている」

中学校：「自分たちで考えさせ、自分たちでできることは任せる」「授業中だけではなく、別の場所で声をかけたり、他の教員との情報共有を行っている」「グループ活動等をしているときに気になる子に声をかける」

●できる限り教室に居る

小学校：「なにか気になることがあれば、授業の後話をきく」「授業の中で多くの児童と会話しようとしている」

中学校：「自分たちで考えさせ、自分たちでできることは任せる」「いろいろな場面で役をあたえ､それができたりやり遂げたりできているときに､ほめるようにしている」

●学級目標やルールを大切にする

小学校:「学級目標に関わる話をする」「いじめは絶対に許されないことを常に話している」

中学校：「自分の学級経営のこだわりを大事にして指導を心懸けている」「安心してかかわることができるよう､日頃からあたたかな言葉づかいができるよう指導している」

●平等・公平に接する

小学校：「なるべく平等に接する」「接し方に不平等感が無いようにしている（呼称など)」

中学校：「学級全員と同じように接するようにしている」「個人の能力や性格に関係なくバランスよく接する」

●関係づくり・雰囲気づくり

小学校：「何でも話せる関係づくりに努めている」「何気ない会話を心がけリラックスした雰囲気づくりをしている」

中学校：「お互いを認め合える関係づくりを主に取り組んでいる」

●言葉遣いに気をつける

小学校:「前向きになるような言葉がけをしている」「○○がいいねと前向きな言葉で話す」

中学校：「プラス志向の言葉かけをする」「ティームティーチングの形なので、自分が気付けない部分を情報共有したり、気になる生徒には個別指導をするなどの声かけを行なっている」

●その他

小学校：「自分自身の弱いところを出す」「『できた』の経験がそれぞれできるように支援」

中学校：「小さな事でも、生徒の行動に対して、１日５回『ありがとう』を言うようにしている」「感謝の気持ちを生徒に示すことを心がけている」

②授業において

授業における配慮や工夫について、小学校 522 名、中学校 144 名からの回答を研究員２名で検討した。その結果、表３－４に示した 13 のカテゴリーに分類された。小学校においては「ほめる、意欲を高める工夫等」の回答が最も多く、次いで「活動や授業の工夫」、「発表・発言・活動の機会を作る」、「机間指導」の回答が続いた。授業中の実際の配慮や工夫についての回答が多く挙げられていたことが伺える。また、「メモ・記録」、「学習状況・態度・困り感等実態把握」、「子どもの声を聞く・拾う」のような子どものニーズの把握に関わる回答も多く見られた。中学校においても、小学校と同様に、「活動や授業の工夫」、「机間指導」、「ほめる、意欲を高める工夫等」、「発表・発言・活動の機会を作る」といった授

業中の実際の配慮や工夫についての回答が多く認められた。

しかしながら、全回答者数における割合をみていくと、それぞれの配慮や工夫は決して多くの教員に実施されているものではないという結果であった。

表３－４　授業における配慮と工夫における回答者数と校種ごとの割合

カテゴリー	小学校	中学校
ほめる、意欲を高める工夫等	100　(19.2%)	18　(12.5%)
活動や授業の工夫	83　(15.9%)	34　(23.6%)
発表・発言・活動の機会を作る	77　(14.8%)	17　(11.8%)
机間指導	60　(11.5%)	20　(13.9%)
メモ・記録	60　(11.5%)	9　(6.3%)
学習状況・態度・困り感等実態把握	36　(6.9%)	6　(4.2%)
学級の雰囲気づくり	24　(4.6%)	5　(3.5%)
子どもの声を聞く・拾う	23　(4.4%)	9　(6.3%)
個別に目を合せる・声かけする	20　(3.8%)	11　(7.6%)
子どもとの対話や関係づくり	17　(3.3%)	5　(3.5%)
個別指導	17　(3.3%)	5　(3.5%)
特性にあった教材等の準備	3　(0.6%)	0　(0%)
教員・支援員等との連携・役割分担	2　(0.4%)	5　(3.5%)

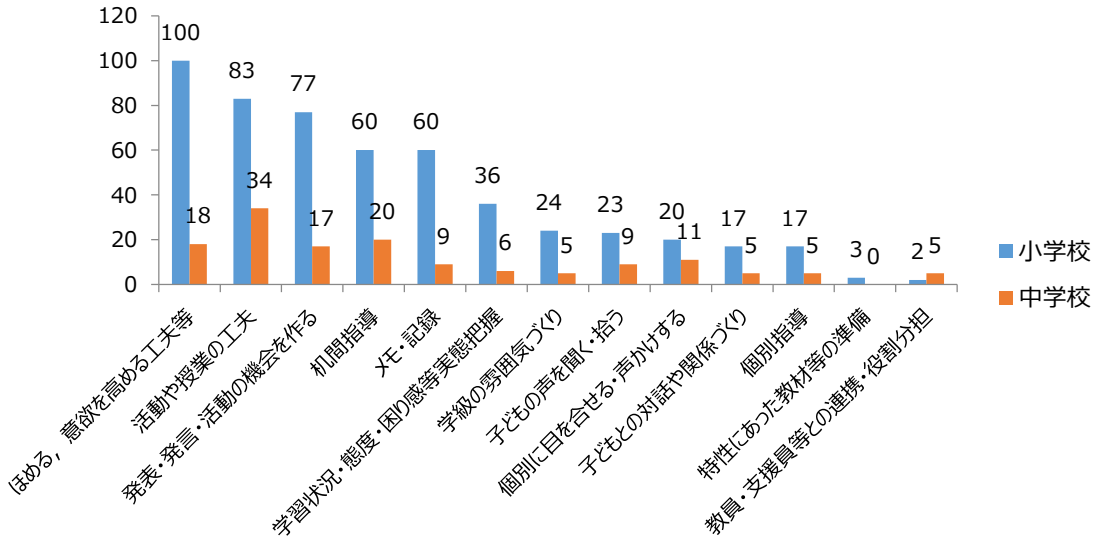


図３－12　授業における配慮と工夫における回答者数

以下にカテゴリーごとの回答を抜粋して示す。

●ほめる、意欲を高める工夫等

小学校：「ささいな気づきでも認めるよう心がけている」、「できばえよりも、がんばってやろうとしたことや、友だちのためにしていることをほめる」

中学校：「できた事をほめる。できない事は一緒にできる様にする」「テスト返却時や授業中の成果に対して評価を言葉で伝え、同時にアドバイスも伝える」「理解度に合わせて役割を振る。その役割を通してほめたり、考えさせたりする」

●活動や授業の工夫

小学校：「誰にでも答えられそうな発問を１日１回はする」、「多くの子が主体的に取り組めるよう、導入や展開を工夫している」

中学校：「必ず全員のノートやプリントを授業中に確認し、発表や話し合いで位置付けるようにしている」「座席表指導案を活用し、生徒の様子をメモしている」「生徒の疑問を全体に共有し解消することによって、安心感をあたえる」「やり方・手順をいつでも確認できるように黒板に記入」「学びあう場面を設定し、間違いやつまずきを大切にする雰囲気づくりに努めている」

●発表・発言・活動の機会を作る

小学校：「偏った指名をせず、色々な子に発言のチャンスを与えている」「全員が主役になれるような機会をつくる」

中学校：「授業内で全員が発言したり、グループ内で発言できるなど何かしら参加できるよう工夫している」「全員が１回でも数学の１時間の中でわかったできた楽しいと思えるような瞬間をつくるようにしている」「問題の難易度を踏まえて、できる限り多くの生徒を当てるようにしている」

●机間指導

小学校：「なるべく机間をまわり、言葉をかけたり、困っている児童に支援しようと思っている」、「机間巡視をして、子どものノートの考えを、その場で評価したり、結果をなるべく時間をおかずに返すようにしている」

中学校：「Ｔ・Ｔの教師との連携」「机間巡視を中心に一人一回は会話するように心がけている」

●メモ・記録

小学校：「全員の名前の書かれてあるノートに、気付いたことをメモしている」「子どものステキな発言・行動またはうまくいかなかったことなどをメモをするようにしている」

中学校：「発言や取り組みについて記録する」「授業中の一人ひとりの様子を座席表にメモして整理するようにしている。全校生徒を見ているので、進度や気になることをメモするようにしています。気になったことは、担任や学年教員と共有するようにしています」

●学習状況・態度・困り感等実態把握

小学校：「理解度や取り組みの状況をできる限り把握するようにしている」「ノートは毎回チェックする。プリントは集めて、できないところはその日のうちに一緒に取り組む」

中学校：「技能の練習などは一人一人の様子をチェックし、遅れがないか見る」「個の得意不得意に合わせて、グループワークでも人よりも、注意して、見守り、声かけをする」

●学級の雰囲気づくり

小学校：「全員が発言できる雰囲気づくりに努めている」、「笑顔で授業をする」

中学校：「学びあう場面を設定し、間違いやつまずきを大切にする雰囲気づくりに努めている」「多様な人の中で学ぶことの意義について折りにふれて話す」「年度の初めの授業において、失敗や間違いは大歓迎であるということを伝え、困っている生徒には適切な支援をしていくように心がけている」

●子どもの声を聞く・拾う

小学校：「できるだけ全員の声をきけるようにする」「つぶやきから、ほめポイントをひろう」

中学校：「出た意見を否定しない。なぜそうなるのかという問いとなげかけ、多くの生徒とコミュニケーションをとるようにしている」「子どもが発した言葉に注意し、よい意見を聞きのがさないようにしている。人権的に問題のある発言や行動などに対しては、その場ですぐに指導をし、後に引きずらない」

●個別に目を合せる・声かけをする

小学校：「子どもの目を見て発問する」、「つまずきがちな子への声かけ」

中学校：「特に学習が苦手な生徒にはアイコンタクトをしながら授業を進める」「授業中だけではなく、別の場所で声をかけたり、他の教員との情報共有を行っている」「グループ活動等をしているときに気になる子に声をかける」

●子どもとの対話や関係づくり

小学校：「なにか気になることがあれば、授業の後話をきく」「授業の中で多くの児童と会話しようとしている」

中学校：「技能の練習などは一人一人の様子をチェックし、遅れがないか見る」「個の得意不得意に合わせて、グループワークでも（他の）人よりも、注意して見守り、声かけをする」

●個別指導

小学校：「個別に声をかける、必要に応じて休み時間に個別指導をする」「特性にあった教材等の準備」「座席では一人では学習にとり組めない子を集めて個別指導」

中学校：「運動の苦手な生徒に多く声かけをしている」「数学の苦手な生徒には必ず声をかける。個別によんで、教えるときもある」

●教員・支援員等との連携・役割分担

小学校:「担任一人ではなく少人数学習支援の先生など複数の目で子どもの追究や理解の度合いをつかみその後の指導にあたっている」

中学校 :「Ｔ２と連携して、個別に支援が必要な生徒へ対応」「ティームティーチングの形なので、自分が気付けない部分を情報共有したり、気になる生徒には個別指導をするなどの声かけを行なっている」

（３）子ども同士の関係づくり

学級の子ども同士の関係づくりにあたって、どのような配慮や工夫をしているかについて、①学級経営において、②授業においての２つに分け、自由記述で回答を求めた。

①学級経営において

学級経営における配慮や工夫について、小学校 536 名、中学校 147 名からの回答を研究員２名で検討した。その結果、表３－５に示した９つのカテゴリーに分類された。小学校においては「良さを認め合う・全体に伝える」の回答が最も多かった。学級における子ども同士の関係づくりについては、 子どもと先生との関係づくり同様、子ども一人一人の良いところを見つけることが大切にされ、さらにそれを学級全体で認め合う内容が多く挙げられていた。次いで「子ども同士がかかわる時間を作る」、「子ども同士の理解が深まるようにする」の回答が続いた。子ども同士がかかわる時間を作ったり、相互理解を促したりするための活動が多く行われていることがわかった。

中学校においては、「子ども同士がかかわる時間を作る」の回答が最も多く、次いで「良さを認め合う・全体に伝える」「子ども同士の理解が深まるようにする」といった回答が多く認められた。

表３－５　授業における配慮と工夫における回答者数と校種ごとの割合

カテゴリー	小学校	中学校
良さを認め合う･全体に伝える	266　(49.6%)	40　(27.2%)
子ども同士がかかわる時間を作る	116　(21.6%)	43　(29.2%)
子ども同士の理解が深まるようにする	103　(19.2%)	36　(24.5%)
グループ構成や座席配置を工夫する	38　(7.1%)	14　(9.5%)
学級全体(係)の活動を大切にする	36　(6.7%)	19　(13.0%)
学級のルールを示す	33　(6.2%)	5　(3.4%)
子どもが活躍できる場を設定する	25　(4.7%)	11　(7.5%)
子ども同士の関係を観察する	8　(1.5%)	1　(0.7%)
その他	16　(3.0%)	7　(4.8%)

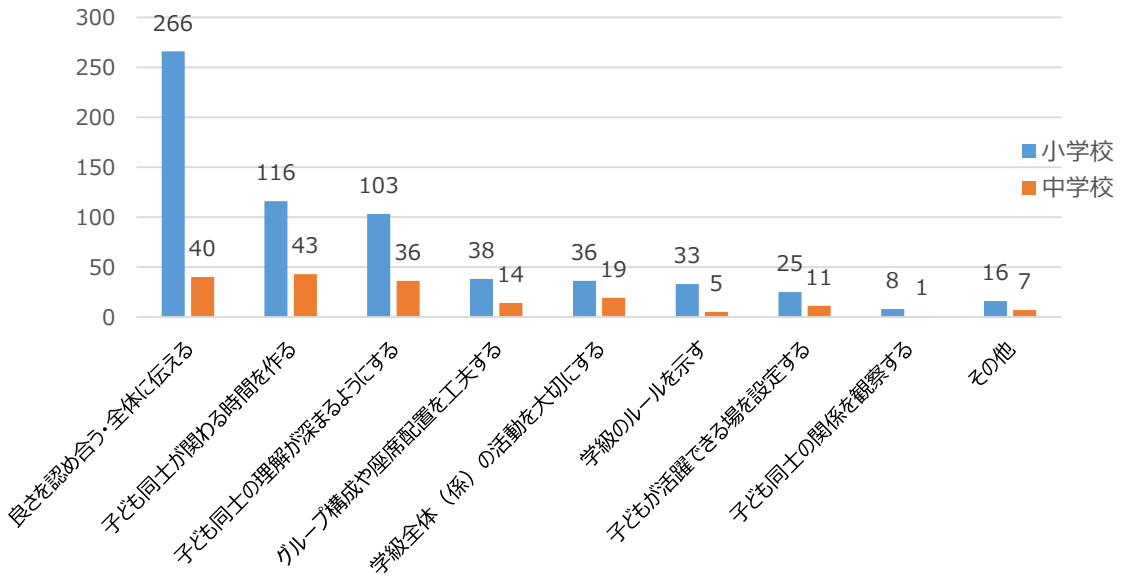


図３－13　学級経営における配慮と工夫における回答者数

以下にカテゴリーごとの回答を抜粋して示す。

●良さを認め合う・全体に伝える

小学校：「教師がほめることで、周囲の子がその子のよさやがんばりを認めることができるようにする」「お互いの良さを伝え合う時間を意図的に設定している」

中学校：「級友の良さを認める活動を行事などの節目に行っている」「短学活を利用して、その日に活躍した生徒を日直に発表して、良さを広めるようにしている」

●子ども同士がかかわる時間を作る

小学校：「話合い活動を多くとり入れ、子ども達同士で考え合う時間をとる」「週１回、学級全員での共遊の日を設けている」

中学校：「生徒に任せる部分や、かかわらせる部分は、不必要に教師が出ない（出番を考える）」「何事にも他者とのかかわりをもつよう意図的に場面を設定する」

●子ども同士の理解が深まるようにする

小学校：「一人ひとりのちがいについて、日常的に話をし、それがあたりまえでそれがいいんだということを考えさせるようにしている」「ひとりひとりの将来の夢、たん生日、すきなこと、得意なことなどをみんなが共有できるように、けいじ物を工夫したり、おたん生日おめでとうをしたりしている」

中学校：「帰りの会で、１分間スピーチをやっています。互いのことに関心をもつきっかけ作りになっていると思います」「学級通信で生徒の考えやできごとを学級全体に伝えるようにしている」

●グループ構成や座席配置を工夫する

小学校：「児童の能力・性格・相性など配慮し座席やグルーピングを工夫している」「特定の子とだけかかわるのを防ぐためにチームづくりや班などは全て担任が決めてい

る」

中学校：「班長会議を用いて、その時期・関係に応じた適切な座席になるようにする」「グループ形成時の指示（いつもと違う、組んだことのないメンバーで構成させる）」

●学級全体（係）の活動を大切にする

小学校:「自分で仕事を考えて実践する係活動となるよう係会や係の発表の時間を確保するようにしている」「全員で取り組める活動を設定するようにしている」

中学校：「任された仕事（委員会活動、係活動）を大切にする」「学級全体が「仲間」であるという意識を持たせるようにしている」

●学級のルールを示す

小学校：「あいさつや礼儀（ありがとう、ごめんね）を大事にするような声かけを徹底している」「クラスのテーマとして助け合い、認め合い等の内容を入れ、掲示して、意識できるようにしている」

中学校：「学級目標や行事での目標を全体に意識させる」「いじめは許さない。何事も全力で、ルールやマナーを守る、という３点について年度の初めに担任の思いとして伝えている」

●子どもが活躍できる場を設定する

小学校：「一人ひとりの子どもが学級の中で活躍できるようにしている」「班の中でリーダー（掃除リーダー、給食リーダー、学習リーダー）をつくり、全員が活躍できる場を設ける」

中学校：「生徒の日記をもとに、特に目立たない子たちが少しでもみんなの前で自慢げに話せるように、書いてあったことを給食の時間に取り上げる」「得意なこと（絵をかくなど）を学級のために活かしてもらう」

●子ども同士の関係を観察する

小学校：「休み時間の遊びや、交友関係をみる」「休み時間、子供達と遊びながら観察・声かけなどしている」

中学校：「休み時間などの生徒の動向を観察して人間関係を把握している」

●その他

小学校：「『みんな同じ』にこだわりすぎない雰囲気づくり」「トラブルはなるべくその日のうちに解決している」

中学校：「常に笑顔でいられるような雰囲気づくり」「常に『命の重さ』について伝えている」

②授業において

授業における配慮や工夫について、小学校 542 名、中学校 148 名からの回答を研究員２名で検討した。その結果、表３－６に示した７つのカテゴリーに分類された。小学校・中学校とも「ペア学習・グループ活動」が最も多く、小学校 232 名（42.8 %)、中学校 75 名

（50.7%）と約半数が実施してい。続く「交流場面の設定」では小学校で 123 名（22.7％）、中学校で 20 名（13.5%）、「スモールティチャー」は小学校で 50 名（9.2%）、中学校で 11 名（7.4%）と小学校の方が実施割合が高かったものの、全体としてはあまり実施されていないという結果であった。

表３－６　授業における配慮と工夫における回答者数と校種ごとの割合

カテゴリー	小学校	中学校
ペア学習・グループ活動	232　（42.8 %）	75　（50.7%）
安心の保障	23　（4.2%）	8　（5.4%）
学級ルール	25　（4.6%）	1　（0.7%）
教員のサポート	38　（7.0%）	2　（1.4%）
ほめる・みとめる	35　（6.5%）	6　（4.1%）
交流場面の設定	123　（22.7%）	20　（13.5%）
スモールティチャー	50　（9.2%）	11　（7.4%）
その他	16　（3.0%）	25　（16.9%）

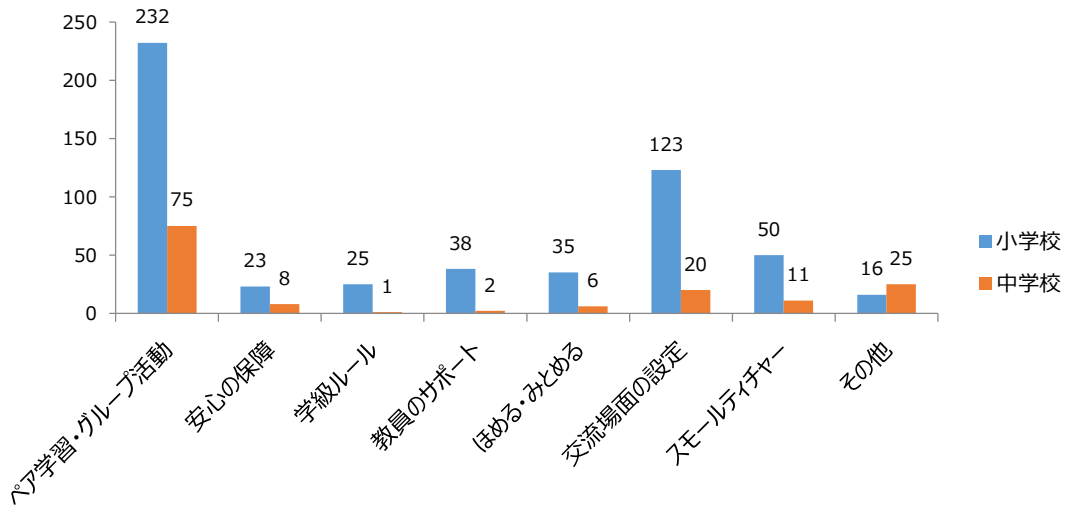


図３－14　授業における配慮と工夫における回答者数

以下にカテゴリーごとの回答を抜粋して示す。

●ペア学習・グループ活動

小学校：「ペアでの話し合いや「お助け」で教え合う活動を取り入れている。」
「隣同士、グループで学び合う時間の設定する。相手の話をきちんと聴くように指導している」「グループで、だれもがリーダーになる場合を設ける。」

中学校：「協力して取り組む課題をあたえるグループワーク、ペアワーク等を様々なくみ方でやらせる」「隣り同士や４人グループでの助け合い学習。得意な子どもには積極的に周りを助けるように伝えている。（ドリル学習時）」

●安心の保障

小学校：「気づいてない時は、教えてあげてもよいことを伝える。わからないと言うことも大切、ということを知らせ、説明することで学びが深まることを話して、教え合う場面をとるようにしている」「助け合いの場面設定。話し合って解決することを大切にする」

中学校：「課題が分からない時に、まわりの人にきく時間をつくる」「誰にでも聞くことができるように環境を設定する」「間違えても良い環境づくり」

●学級ルール

小学校：「話し手に対する傾聴の意識をもたせる。学び合いの中での気づきを全体で共有できるようにする」「「つけ足します」「お助けします」という発言のさせ方」「相手の話をさいごまできくよう指導している」

中学校：「生徒の表情、声をよく見て聞きます。言ってはいけないこと、やってはいけないことのルールは守らせ、安心して過ごせる場をつくるよう心がけています。」

●教員のサポート

小学校：「学習面で難しい子でも発言しやすい発問も投げかけるなど、なるべく皆に活躍の場があるようにする」「友達の考えのよさに気づかせる場面を意図的に設定する」「席を自分たちで決めさせ、日々の授業でのグループ活動で全ての子が何かをできるような発問や指示を出し、その責任についても考えさせている」

中学校：「○○くんだったら何て言うと思うか聞いてごらん、とこちらからかかわらせようと言葉をかける」「友だちとうまくかかわれない、集団行動が上手くとれないなど、つまづきをもつ子にとって体験を通じて学ぶ場が必要であるので、その子なりに参加できる班、小グループペアで練習したり、考えたり、活動する場をもつようにしている。小さな成功の気もちを持たせたい」

●ほめる・みとめる

小学校：「教師がほめるだけでなく、友達からもほめてもらえるような場を設定する」「あたり前のこととしてやっている子をとても価値づける」「ピアサポートをする子、みつける子を大事にし、積極的にほめる」

中学校：「男女一緒に行い、互いを認め合う態度を重視する」「鑑賞の授業で互いの作品を見て、感想やよいところを伝え合う場面を設定している」

●交流場面の設定

小学校：「友達の意見を聞き合う場を多く取り入れている。同意したり反応したりするように伝えている」「子どもが決められるところは、話し合いで決めさせている」

中学校：「授業のほとんどの場面で小グループによる話し合いなどの活動を取り入れている」「毎回席替えさして、様々な友達と関り合えるように工夫している。また、ペアワークやグループワークを多く設定し、授業の中での人間関係づくりも心掛けている」

●スモールティチャー

小学校：「教え合いを大切にする。（自分ができればよいという考えにならないように）ミニ先生を作って教え合いをする」「得意分野をいかすことが出来るよう、教えあい活用をしたりする」

中学校：　「分かった生徒が分からない生徒に教える場面を意図的に設定している」「隣同士、班の中で、分からない所を教え合う場面を設定している」

●その他

小学校:「理解の早い児童が困っている児童にヒントを考えたり分かるようお話するにはどうしたら（どう話したら）よいか考えさせる」「ソーシャルスキルを高める場面」

中学校：「努力すれば、しっかり得点をとれるような、テストづくり、評価をする」「対話活動というスキルトレーニングを週一で実施している」「グループエンカウンターの授業をしたり、グループ活動を授業中に取りいれたりしている」「Ｑ－Ｕを利用した小グループの設定」

（４）交流及び共同学習の実施状況について

特別支援学校及び特別支援学級との交流及び共同学習を実施しているかについて尋ねた結果と、担任している学級に通級指導教室を利用している児童生徒が在籍しているか尋ねた結果について、小学校の結果を図３－15 に、中学校の結果を図３－16 に示した。

特別支援学校との交流及び共同学習を実施している教師は、小・中学校とも１割前後であった。特別支援学級とは、小学校で５割弱であり中学校で６割であった。通級指導教室を利用している児童生徒がいる教師は小・中学校とも全体の４分の１であった。

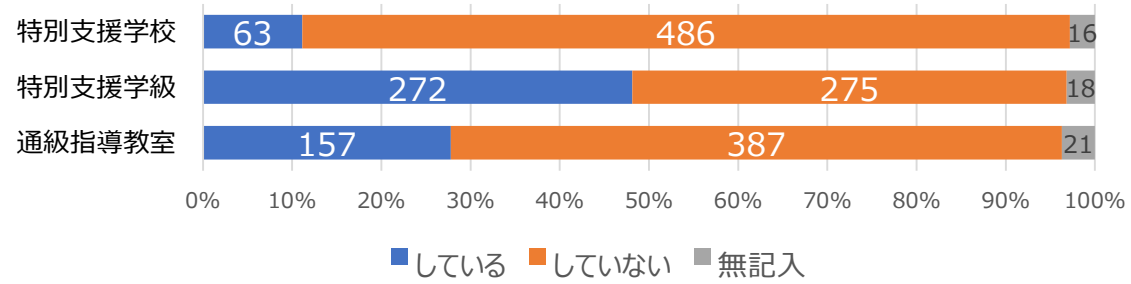


図３－15　交流及び共同学習の実施状況と通級指導教室の利用状況（小学校）

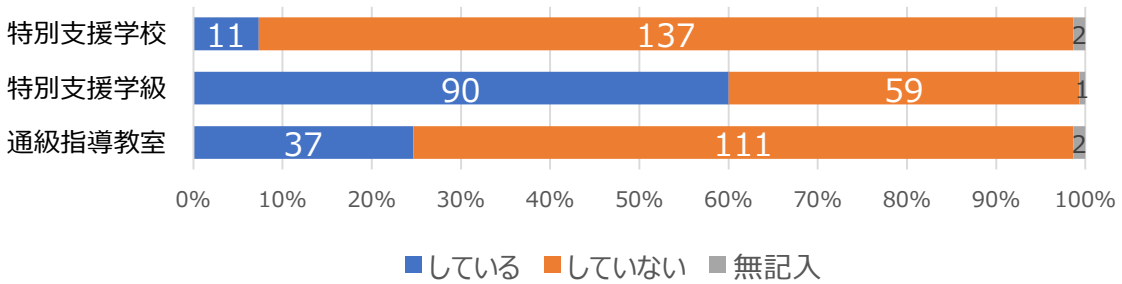


図３－16　交流及び共同学習の実施状況と通級指導教室の利用状況（中学校）

（５）特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に関する説明の経験

担任している学級の児童生徒に対して、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に関する説明の経験の有無について尋ねた結果を、小学校は図３－17 に、中学校は図３－18 に示した。

特別支援学校については、小・中学校とも１割前後、特別支援学級については、小学校で４割、中学校で３割、通級指導教室については、小学校で２割、中学校で１割であった。

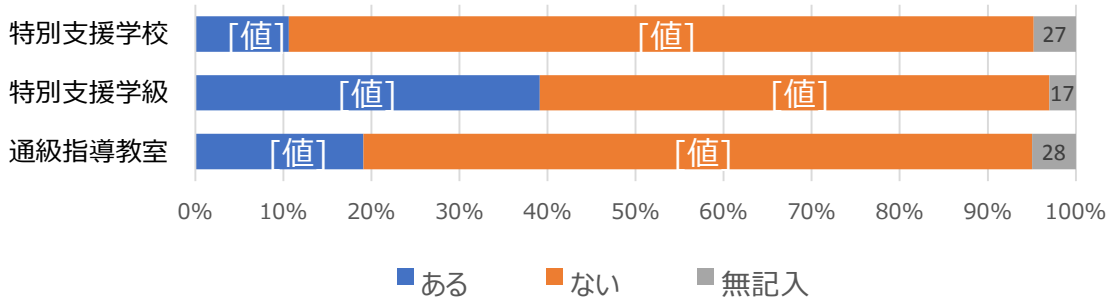


図３－17　特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に関する説明の経験（小学校）

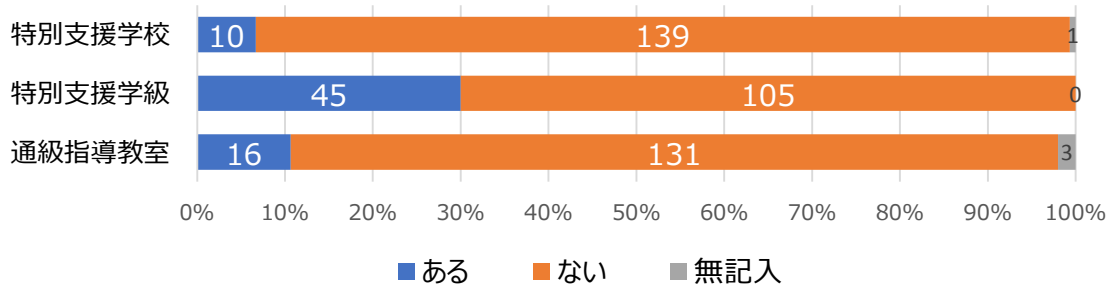


図３－18　特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に関する説明の経験（中学校）

（６）障害や障害のある人に関する授業の経験

通常の学級の担任として、障害や障害のある人に関する授業を実施した経験の有無、実施した教科（総合的な学習の時間については学校全体として回答を得ているため、ここでは除外して回答を求めた)、その授業の授業者について回答を求めた。

小学校の回答者における授業経験の有無を図３－19 に、実施した教科について図３－20 に、中学校の回答者における授業経験の有無を図３－21 に、実施した教科について図３－22 に示した。

障害や障害のある人に関する授業を実施しているのは、小・中学校とも４割前後であった。実施教科を見ると、小・中学校とも道徳が多かった。続いて、小学校では、国語が多く、中学校では、社会、数学、英語の順であった。教科書に障害や障害のある人に関する内容が含まれているためであると考えられる。少数だが、体育・保健体育ではパラリンピックを題材にした授業がなされていた。また、音楽では、日本の伝統的な音楽文化におい

て、視覚障害のある人が果たしてきた役割について学ぶなどの回答が見られた。

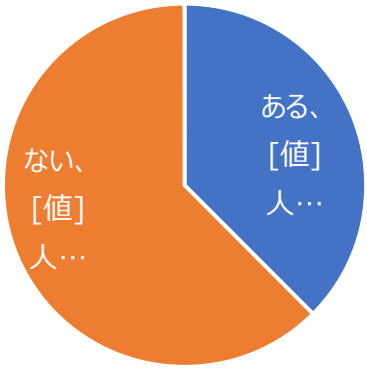


図３－19　授業の実施の有無（小学校）

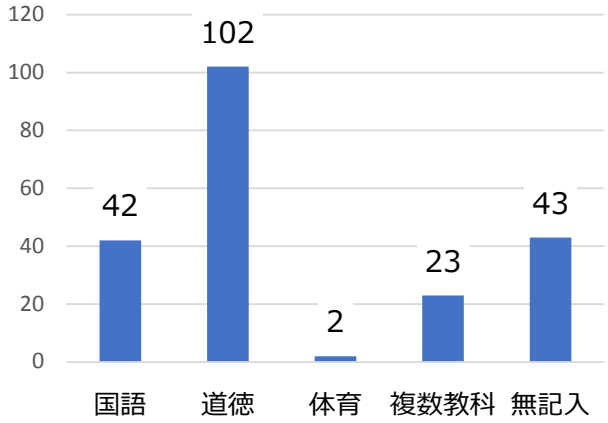


図３－20　実施した教科（小学校）

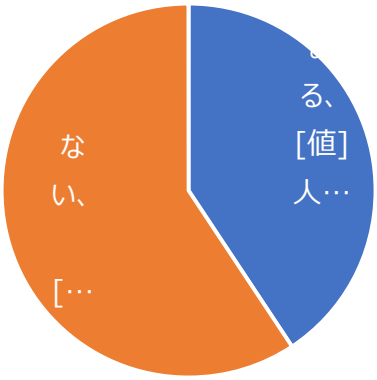


図３－21　授業の実施の有無（中学校）

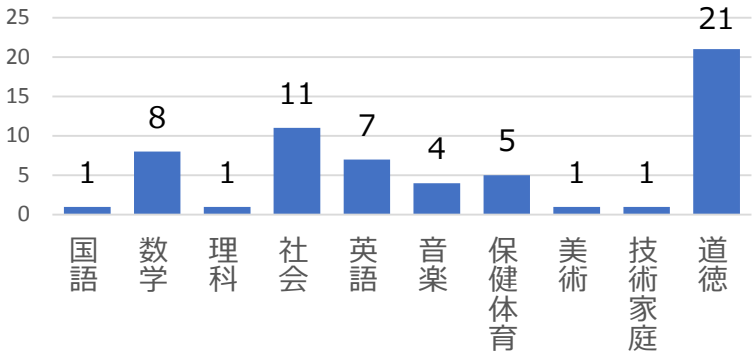


図３－22　実施した教科（中学校）

学級担任以外の授業者についての回答では、「障害のある人」が小学校で 46、中学校で３回答された。数は多くはないが、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室の担当者も回答されていた。

授業後の子どもたちの変化について、自由記述で回答を求めたところ、以下のような内容の回答があった。

●障害の有無にかかわらず互いを認めあうことの大切さに気づいた
- ・障害のある友達を特別視せず、同じ年の仲間として認めることができた
- ・人それぞれいろいろなちがいを持っていてよいということを考えることができた
- ・障害があっても、自分たちと同じように行動できることを理解した

●障害に関する考え方が変化した
- ・障害のある方の強さに刺激をうけたり、自分ができることがあればやりたいという思

いをもったりした
・障害を特別なこととしてとらえず、多様性としてできる子が増えた
・障がいは不便だが不幸ではないという姿を学んだ
●障害のある人とかかわり方がわかった
・車イス・アイマスク等で、実際体験を通して自分たちが、どのように接するべきか考えることができた
・顔をあわせて見ながらはっきり話をしたり、合図を送ったりして交流していた
・こまっている時には自分から声をかけかかわるようになった
●自分自身の生き方や考え方を振り変えることができた
・自分の思いだけでなく、相手を知らなければいけないことがわかった
・まわりのともだちに関心をよりもつようになった
・相手の気持ちを大切にしようという変化が見られた

４．考　察

本調査の目的は、小・中学校の通常の学級が日頃行っている授業や学級経営の中にあるインクルーシブ教育システムの理解啓発につながる実践を広く調査し、分析することを目的とした。81.0％という高い回収率により、通常の学級の実態を一定程度把握することができたと考える。

（１）気になる子どものまわり子どもへの支援や配慮について

インクルーシブ教育システムを構築する上で、障害のある子どものまわりにいる子どもたちの理解やまわりの子どもたちへの支援等は欠かせない。今回の調査では、いずれの学校においても、気になる子の多様な特性を踏まえつつ、その子の特性の説明やまわりの子どもに依頼したい配慮、教師自身の配慮の内容も多岐に渡っている。学級全体に対して投げかけること、児童生徒個々に対応していくこと、両方の対応を組み合わせるなど、その状況に応じた教師の工夫や試行錯誤が伺える。

一方で、気になる子の具体的な説明ではなく、様々な人がいるという多様性を認めていくことなどの一般論を学級全体に投げかけ、学級の雰囲気づくりの工夫も多く回答されていた。少ない回答割合ではあったものの、「本人が居ない場面で説明」するという回答も見られた。その教師なりの気になる子への配慮として捉えていきたい。

また、小学校よりも中学校の回答割合が高かったのは、「本人・保護者の了解を得た上で説明」、「まわりの子どもの理解があり、説明・配慮の必要が無い」、「説明・配慮の必要な場面が無い」の項目である。本人や保護者の了解を得ることは、本人の特性について的確に伝えていくことや本人や保護者の思いを大切にしていると捉えられる。

まわりの子どもの理解は、幼稚園や保育園等から小学校、中学校と一緒に過ごしてきていることを理由とした回答が多い。説明や配慮を必要としていないことについては、学級では気になっている子ではあるものの、特別な対応をするまでの場面が無いことが多く挙

げられていた。

コメントから小学校においても中学校においても、学級の状態は多様化しており、学級全体への対応やまわりの子どもへの対応、気になる子自身への対応について、担任教師の学級づくりに対する考え方や姿勢に基づいて、試行錯誤している状況が伺えた。

（２）学級経営における関係づくりの工夫

小・中学校とも、学級経営における工夫として実施している内容は概ね共通していることが分かった。学級の子どもと教師の関係づくりでは、教師が子どもの良さを認める内容が多く、また、その子どもの良さを学級の全員に伝え、お互いに認め合うことで子ども同士の関係づくりに生かしている内容が多く見られた。

また、子ども同士のかかわりにおいては、小学校に比べ中学校の方が子ども同士のかかわりを大切にし、子ども同士で主体的に理解を深めていくような活動が多く取り入れられている傾向がみられた。

（３）授業における関係づくりの工夫

授業においても、小・中学校とも授業における工夫として実施している内容は共通していることが分かった。学級の一人ひとりの子どもと教師との関係づくりでは、取組の内容に幅が見られたが、子ども同士の関係づくりになると、「ペア学習・グループ活動」が多くを占め、他の工夫はあまりみられなかった。また、小学校の方が比較的多様な場面で工夫をしている教員が多く、中学校になると授業中の活動を通して工夫をしている教員が多い傾向がみられた。

（４）障害や障害のある人に関する授業の実施

障害や障害のある人に関する授業の実施について、小学校では、７割を超える学校で総合的な学習の時間に、４割近い教師が教科の授業で実施していた。また、中学校では半数の学校で総合的な学習の時間に、４割の教師が教科の授業で実施していた。様々な制約もある学校において、障害や障害のある人に関する授業が数多く行われていることがわかった。小・中学校とも、特別の教科道徳での実施が多かったが、それ以外での教科での実施も見られた。これは、視覚障害やその支援に関すること、バリアフリー等に関することなど、教科書に障害や障害のある人に関する内容が含まれることが増えたことや令和２年に東京パラリンピックが開催されることに起因すると考えられた。

文部科学省は、令和元年『心のバリアフリーノート』を作成しインターネット上に公開し、学校での利用を呼びかけている。これには「小学生用」と「中高生用」があり、それぞれ児童生徒のための【本編】と教師用の【指導者用】があり、文部科学省のホームページからダウンロードできるようになっている。こうした教材の活用も含めて、障害や障害のある人に関する授業が実施され、障害や障害のある人に関する理解が進むことが期待さ

れている。

＜文献＞

・文部科学省(2019)　【小学生用】心のバリアフリーノート　【本編】
・文部科学省(2019)　【小学生用】心のバリアフリーノート　【指導者用】
・文部科学省(2019)　【中高生用】心のバリアフリーノート　【本編】
・文部科学省(2019)　【中高生用】心のバリアフリーノート　【指導者用】
（文部科学省ホームページトップ>教育>小学校、中学校、高等学校 > 学習指導要領「生きる力」>授業改善のための参考資料（教職員向け）>各教科等に関係する教材や資料集等のウェブサイトについて https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1394142.htm から公開）